

そして、消費者にできること
～ミツバチたすけ隊の COP10 ブース展示に寄せて～

2010年10月
たべつむぎ(佐世保市・食育活動)

日本西端、佐世保の郊外で個人で食育活動をしています「たべつむぎ」です。
現在起こっているミツバチの大危機に、何とかしなければとCOP10のブース展示を決意なされた気概ある「ミツバチたすけ隊」に心から敬意を表します。
展示に寄せて、私もレポートを書かせて頂きます。

.....

①ミツバチがいない

日本中、世界中で激減するミツバチ。私の周りでもこのことを実感している人は多いらしく、特に農業者や庭づくり好きの年配の方からは「見なくなった」との声をよく聞く。

この春夏、私も自家畑を耕しながらミツバチの存在に気を払っていたが、確かに、いない。

「ハチミツが採れなくなって大変ねー」

—その通りであるが、それだけならば楽観的すぎる。

既知のように、私たちが食べている多くの作物は、ミツバチをはじめとした虫たちの存在なくしては生り得ない。私たちが見渡すこの風景、立っている土、吸っている空気は、人間が自力で生成、維持しているのではない。

私たちは次の言葉を知っておかないといけな。

「ミツバチが絶滅すれば、それから4年後に人間も絶滅する。」(アルベルト・アインシュタイン)

②久志先生とミツバチたすけ隊

と書いときながら実は私自身も、このミツバチの問題の重要性に気がついたのは、そんなに前の話でもないのであった。

今年に入ってからだったか、日本農業新聞が世界で起こっているミツバチ急減の問題、すなわち「CCD(蜂群崩壊症候群)」のことを連載記事にしていた。

ミツバチたすけ隊に出会ったのもその前後だったと思う。2010年3月、私が仲間と一緒に企画した「いのちと食をめぐる」という会において、『ニホンミツバチとともに生きる ～養蜂を通して見える農業、環境、人～』と題したフィールドトークを、ミツバチたすけ隊隊長の久志先生にお願いした。

久志先生はニホンミツバチを心底、愛している。ニホンミツバチは人懐っこく、頭もいいということだ。先生曰く、ミツバチは20の言葉(羽音)を持っている。(そして先生はその言葉を理解できる。)

現在の日本で養蜂業といえば、その多くはセイヨウミツバチによるものであるが、久志先生の尽力もありニホンミツバチが見直されるようになってきた。

ニホンミツバチは日本の野生種というだけあって、病気に強く、ミツバチの天敵オオスズメバチの被害にも強いという。生産管理がしやすいとされるセイヨウミツバチに比べても、安定性と収益は高く見込めるそうだ。(実際に長崎県の壱岐や五島でも、ニホンミツバチ養蜂が生業として成り立っている。)

このように、「ニホンミツバチがいかに素晴らしい生き物か」を実践を通じて多くの人に知ってもらおうことが、本来ならば久志先生のライフワークである。

しかしながら今、先生はそこに注力できない。先生の飼っていたミツバチたちも大量死。養蜂家たちの多くが困ばしている。そして野菜果物の受粉のためにミツバチを必要とする農家も頭を悩ませている。

もはや、ニホンミツバチに限らないミツバチ、そして生態系全体がおかしい。

久志先生とミツバチたすけ隊の活動は、この大きな危機に立ち向かっている。

③この危機の原因はなにか

独立行政法人・畜産草地研究所が今年4月に、「ミツバチ不足に関する調査研究報告書」を発表した。「不顕性感染による蜂病」が影響していると考えられ、その他の要因として疑われたウイルスやストレス、農薬については関与しているかどうか今回断定できなかったとしている。

しかし、研究所の原因特定を待ってから始めよう、という状況では既にある。ここでは、長年ミツバチと付き合い、ミツバチの大量死を目の当たりにしている養蜂家や久志先生の声に耳を傾けるべきである。

私自身の未熟を知りながら、それでもあえて断言したい。

このミツバチ大量死に始まる危機の原因は、「ネオニコチノイド」系農薬である。現在日本で稲作・果樹・野菜・茶・花きなど、あらゆる分野で使用されている。稲作ではカメムシ防除などのために使用される。その特徴は生物の神経回路に直接作用するということだ。効き目は抜群である。

私は農薬絶対反対の立場ではない。しかし、この農薬に関しては反対である。この農薬が全国で使用が拡大した時期や場所が、ミツバチの死滅と重なること。そして私の知る養蜂家曰く、「これまででは考えられないミツバチの奇行と死に方」が、まさに神経に作用するというネオニコチノイドの効果であると、(素人の私にも)そう考えられるからである。

知り合いに養蜂家がいらっしゃる方は、ぜひとも直接尋ねてみてもらいたい。

ネオニコチノイドとミツバチのことに関しては、ジャーナリストの岡田幹治氏の記事や、この10月末に発売されるコミック「美味しんぼ」105巻の中で端的に説明されていると思うでご参照されたい。

④ミツバチだけではない

ミツバチがいなくなると生態系のバランスが崩れる。原因がネオニコチノイド系農薬だとすれば、それはより直接的に各種生態に影響を与え、滅ぼすのではないかと思わされる。農業地域ではミツバチなどの昆虫に限らず、久志先生が言うように、スズメやツバメまでもが少なくなっている。そのことは最近、私も実感するようになった。次第に大きい動物も影響を受け始めているのである。

なかには神経が炎症を起こした農家もいると聞く。また農薬散布時期、作業従事者が頭痛や血便を起こしたりすることとネオニコチノイド系農薬を結びつけるのは、偏った考え方だとは思わない。

私たちがなおミツバチの悲鳴を無視するのならば、危険は静かに私たちを殺すであろう。

そしてミツバチの悲鳴は、養蜂家や農家といった生産者のみに発せられているのではない。それに気づき、行動することで現状にストップをかけることができるのは、消費者である。

⑤規格が農薬を使わせる

生産者(農家)が使っているのだから生産者(農家)が止めればよい、という話ではない。生産者はそれほど自由ではない。

規格に合格するもの、または市場が求めるものを効率よく作るために、推奨される(もしくは認められた)農薬を使うことは、社会的にみて、間違っていない。それを消費者という(これもまた社会的)立場から、やめろというのは理に合わない。

(そもそも、食料において<生産者—消費者>と立場がはっきり分かれている現代社会の在り方自体が問題だと私は考えるが、ここではそこまで言及しないことにする。)

ここで問題としたいのは「規格」である。

例えば、稲作においては穂が出た時期のカメムシ防除が、ネオニコチノイド系農薬使用の理由の一つである。カメムシがついた米粒には黒い斑点が残る。その黒い斑点がついた米粒が混入していると、米の等級は下がり、農家の収入は格段落ちる。

稲作に限らず、果樹でも野菜でも、規格をクリアするための農薬使用は多い。たまに聞く話、「農家自身が食べる分には農薬をふらない」というときの農薬がそれだ。

もし生産者と消費者が顔を合わせて取引をするとすれば、第3者が決める規格は必要ない。しかし現実にはそういうことは稀で、生産者は規格クリアを目指さざるを得ないし、消費者も規格クリアしたものが当然のものを受けとめている。

生産者と消費者は、規格という文法を介してしか語り合っていないのである。

現状を変えるにはその規格を、より多様にすることが課題である。

そして、そのことが成されるためには、生産者や規格を決める機関(国や企業など)ではなく、消費者が動き始めることが肝心である。

⑥消費者にできること

では規格を多様にするために、消費者一人ひとりには、どのようなことができるのだろうか。

○ 私たち消費者は農と食の情報について、アンテナをしっかりと張っておく。

(ただし情報源が単一だと理解が偏る。「食育」も常に偏っていることは承知しておくべきである。)

その際、もちろん「ミツバチ」と「ネオニコチノイド」もキーワードとして含めてほしい。

食と農の理解のために一番良いのは、少しでも生産者になることだ。せめてプランター菜園をやってみたり、手料理を日頃からやっていたら、その理解は早い。

○ 私たち消費者は自分が食べるものは「選べる」、そして「選ぶ」という意識を持つ。

食料品を購入する際、価格や便利さはもちろん大切な判断基準だが、そういった優先順位を一度フラットに戻すことで、自分が食べるものを「選べる」ということを確認する。

また、自身の3年後、家族の20年後、故郷の50年後といった未来への視点を持った上で「選ぶ」。

○ 店頭などで食料を買う際に、分からないことがあれば販売員に必ず尋ねてみる。これは小さな運動である。

ネオニコチノイド系農薬を減らしたいということであれば、その使用の有無を尋ねることにより、「私は消費者として、そのことを気にしている」ことを表明することが大切である。

その表明の積み重ねが「ネオニコチノイド系農薬の使用を控えた」農産物、食品という、規格を創出する。

そういった規格ができれば、農家はその規格に合わせた農産物を作るために知恵を絞り、力を注ぐことができる。

最後に佐世保の話に戻すと、今年、養蜂家や久志先生の働きかけにより、県の農業機関である県北振興局が、ネオニコチノイド系農薬の使用の「推奨」を一時取り消す決断をしたそうだ。これは進展といえる。しかし実状、ほとんどの消費者はこのことに無関心なので、後戻りも容易になされるのではないかと心配している。

久志先生が次のように嘆いていたことが記憶に残っている。

「振興局も危険とわかるネオニコチノイド系農薬を好きで使いたいわけではない。ただ止める理由がないだけ。今、消費者側から一押しがあればいいのに、、、。」

〈おわり〉

私は自分の食べているものに責任をもっていきたいと思い、半自給生活をしながら、「たべつむぎ」という名称で食に関して小さく活動しています。

参加者を募って、鶏をさばいてから食べる「いのちを頂く」ワークショップの開催や、毎週水曜に原則、自分もしくは知り合いの作った食べ物でシンプルな食事をする「坐る食べるの会」などをやっています。

消費者かつ生産者という立場を大事にしながら、私の身体であり、未来である「食」をこれからも地域の皆さんと学んでいきたい所存です。

ミツバチたすけ隊と出会うことにより、ミツバチの減少という大事な問題を知ることができました。そして、それが私たちの未来に直結していることに危機感を感じています。

このレポートにおいては、ネオニコチノイド系農薬について言及、「規格」ということを問題としてます。他にも様々な見方があると思いますので、私自身の勉強のためにも、ご意見いただけましたら幸いです。

有難うございました。

たべつむぎ
tel (0956)56-3756
letter@tabetsumugi.net